

(法政大学出版局、東京都新宿区市ヶ谷田町二一四一、電話  
〇三―五二八―六二八一、一九九二年、四六判、二〇九頁、  
定価二一六三円)

石田純郎編著『緒方洪庵の蘭学』

杉田玄白の『解体新書』にはじまるいわゆる「蘭学」によって日本に伝えられた西洋医学は、当時のオランダやヨーロッパからみて果たしてどのような性格のものであり、どう位置づけられるのであろうか、という誠に興味深い問題は、その研究の困難さのために従来余り明らかでなかったようである。この極めて重要な問題を解明するために、新見女子短期大学石田純郎教授は既に十数回もオランダに渡り、精力的な調査研究をつづけて次々とその成果を世に問うておられるが、本書はその第三冊目のご労作である。

著者はさきに、『江戸のオランダ医』（一九八八年刊）では来日したオランダ医たちの足跡を追ひ、『蘭学の背景』（一九八八年刊）ではオランダにおける蘭学の源流や背景を探究されたが、今回は江戸時代に翻訳された代表的な蘭方医書の数々について、その原典と著訳者たちの精細な調査研究がその根幹となっている。

本書は四つの章からなっており、第一章「緒方洪庵の蘭学」では、緒方洪庵が翻訳した「扶氏経験遺訓」、「病学通論」など十二冊の訳書について、その原典を同定してその著訳者た

ちを検討したが、著者はここで「プロソポグラフィ」というユニークな研究方法を採用している。著者によれば、プロソポグラフィ *prosopography* とは科学史の方で「集団履歴調査法」と訳される用語で、ある同じ舞台の上で活躍した同時代の学者の履歴を一括して調査し、そのグループの特徴や性格を分析する調査方法である、という。

そしてこの方法を用いて分析した結果、緒方洪庵の蘭医学は内科重視の生気論をその核とし、フーヘランドがドイツ人原著者の代表であること、著訳者たちの学統上の特徴はゲッチンゲン大学に学んだ内科医が多いが、軍医学校関係者も少なくないこと、オランダ人原著者は階層がまだ存在していた医療と医育機関のうちの下位の医育機関でまず修学し、その後ライデン大学へ進学して卒業した者が多いこと、また産科、外科の素養のある大学卒の内科医が多いこと、などが判明したと述べられており、示唆に富んだ論説である。

第二章「蘭学書の原著者たち」では、『解体新書』のディクテンや『瘍医新書』などのハイステルとユールホルン、『小児諸病鑿法治法全書』のローゼンスタインとサンディフォールト、『西説内科撰要』のゴルテル、『眼科新書』などのプレック、『生理発蒙』のルバツハ、『篤篤児薬性論』のワートルなど、蘭学史に特有名な訳書の原著者たちの経歴や業績を丁寧に紹介されており、裨益されるところ頗る大きいものがある。

第三章「東アジアの西洋学」は、「種痘の普及」と「朝鮮の

西学と日本の蘭学」という二つの論文からなっている。前者は種痘が世界各地へ普及するのに実は複雑な経過があり、その歴史的背景を知ることが医学史の研究者にとっても如何に大切であるかを知らしめるもので、後者は同じ東アジアの儒教文化圏にありながら、日本の西洋医学の受容が中国や朝鮮とはかなり異なったものであったことが明快に説かれている。

第四章「ヨーロッパ医療界における蘭学のモデルの位置付けについて」は、日本における西洋医学の受容の流れを歴史的に概説したもので、著者によれば、十八世紀にはオランダのギルド外科医界の医学書と技術を日本は受容したが、十九世紀後半にはそのモデルはオランダ軍医学となり、明治に入るとドイツ軍医学となった、という。しかもこれはヨーロッパの医療界の歴史の変遷を反映したもので、フランス革命が大学やギルドという伝統的特権的組織を破壊してしまつたが、多くの戦闘が有能な医療職を必要とし、また産業革命が実際的な技術教育を高等教育にも求めたため、ヨーロッパ各地に軍医学校が設置されることとなった。さらに十九世紀後半には大学もまた陸軍軍医学校に追隨して改革されることになり、日本もこのタイプの医学教育を受容した、と解説されている。説得力のある、誠に重要な論説であらうと思われる。

以上本書の内容を簡単に紹介させて頂いたが、誠にすぐれて示唆に富む論著であり、特にオランダにおける著者の精力的なご調査に深く敬意を表したいと思う。

(津田 進三)

〔思文閣出版・京都市左京区田中関田町二一七 電話〇七五一七  
五一―一七八一、一九九二年、A 5判、三六六頁、定価四九四  
四円〕

#### 小高健著『伝染病研究所』

どうしたわけか、医史学会から書評を命ぜられ、まずは本が届いた。立派な装丁で厚さも手頃、カバーをよくみるとセピア色の古ぼけた写真、淡モノクロの大きく写した伝研の姿に思わずうなつてしまった。

著者は大学卒業後伝研で三十七年間奉職、研究生活の後停年退官されるにあたり、ちょうど創立百年になる伝研の歴史について本書を公開された。恐らくは御自身の墓碑銘を刻むおもいでであろう。また著者は東京大学百年誌の刊行にも参加され、記録を辿るうちに公文書記録からはみ出る人物像も捨てるにしのびなかつたのではあるまいか。充分すぎる程の資料を漁り、江湖の批評にたえ得る緻密な考証。つまり本書は物語りではなく、記録として医史学的な価値の高い研究であるが、他方著者の筆は百年の歴史を色どる様々の群像を鮮かに再現、あちらこちら思わず吹き出してしまふ「傑作」もありこまれ、読む人を飽きさせない。

百年の歴史の中の火花は何といつても北里が文部省移管に反対して北研を作るくだり、二次大戦後予研の分割、医科研への看板かけ替であろう。それにしても常時問題のたえない